

医史学的には、クッパーが銀染色して観察した類洞内外の食細胞について、何時の間にか内外を交換した記載ミスは面白いが、日本人の新発見は五〇年の後でも命名権にクレームがつくことは大きな問題と思つた次第である。用語索引がついて大変便利。

(中西 淳朗)

〔KK岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五―五、電話〇三一五二二〇―四〇五四、二〇〇四年三月、本文二二七頁、本体一〇〇〇円〕

片桐 一男 編

『日蘭交流史 その人・物・情報』

平成一二年はオランダ船リーフデ号が白杵に漂着してから「日蘭交流四〇〇年」に当たる年であった。本書の編者片桐一男氏によれば、この記念すべき年に際して、日蘭学会の「日蘭交流四〇〇年の歴史と展望」を除き、日蘭交流の歴史を概観するような書籍の刊行はほとんどみられなかったという。

もともと平成一二年一〇月二―二三日東京大学山上会館で開かれた洋学史学会主催の日蘭交流四〇〇年記念シンポジウム「江戸時代の日本とオランダ」は、配布抄録集こそ七〇頁にすぎなかったが、内容は質の高い報告が日蘭双方の二五名の研究者によって行われた。その後平成一三年三月フルペー

パーの日本語版一九二頁が出されている。

本書は五〇九頁の本文と、付録として年表、日蘭交流史関係文献一覧、あとがき、各論文の抄録及び序の英文、目次の英文五四頁を含む堂々たる大冊である。本書刊行の目的は、日蘭交流史研究上の最新重要基本文献ということである。

本書を通覧すれば、正にそれが実感される。即ち二四人の気鋭の研究者が、その蘊蓄を傾けて書き上げた力作揃いであり、これら諸論文は編集者によって I. 人の交流と蘭学、II. 書物と人、III. 欧文資料・画像資料、IV. 近世の長崎貿易、V. 情報活動、VI. 洋学の近代の六章に分類・整理され、これらを束ねる言葉として、表題の副題である「人・物・情報」が登場する訳である。

特に評者が共感をもつたのは、俗に多用される言葉「ヒト・カネ・モノ」の金の代わりに、情報という語をもってきたことである。江戸時代に始まった蘭学は、鎖国時代という与えられた条件にあつて、今いう所の海外情報の収集という宿命の性格を負わされたといえよう。最近注目されて研究され、本書でも取り上げられている「風説書」という表現は、これをいみじくも示しているように思われる。

本書の執筆者は殆ど片桐会長主宰する洋学史研究会会員であり、一九八三年発足の同会創立二〇周年事業として企画され、また本書の刊行は結果的に片桐教授の青山学院大学定年退職記念論文集にもなったようである。

次に順序としては内容―各論文についてのコメントという

ことになるのであろうが、これらは多岐にわたり、高度の専門性を必要とするので、評者には不適である。最適任である片桐氏は序の中で全論文について紹介しておられるが、それでも中には一行足らずのものもあるようで、満遍なく行うことは至難の業であらう。

そこで評者は本書で唯一の医学史関係の論文である川島真人氏の「中津医学学校と中津藩蘭学」を紹介したい。これは川島氏が生まれ育った大分県中津市への郷土愛に根ざすものを感じさせるテーマである。

中津医学学校については不明な所が多い。本論文で著者は、広池千九郎の『中津歴史』に基づき、小倉県が明治四年十二月大江雲沢ら四人を医学学校取立方に任じて医学学校及び病院を片端町に開設し、大江春水を教頭、藤野玄洋を病院長として述べている。中津医学学校の実在を示す教科書が中津市歴史民族資料館にあるが、カリキュラムや生徒数などの資料はまだみつかっていないようで、これらによる実体の解明が今後の課題であらう。また廃校の時期も不明である。明治二〇年の勅令で大分県立医学学校等一八の府県立医学学校が廃止されるよりは前と著者は推測している。

校長を勤めた大江雲沢（一八二二—一九九）は子孫により系譜も最近明らかとなり、彼が華岡青洲の没後、一八四一年青洲の実弟で嗣子となった華岡鹿城に入門、大坂の合水堂で花岡流外科を学んだ。雲沢の遺訓「医は仁ならずの術、（故に）努めて仁をなさんと欲す」は、中津医学学校の基本方針となつ

たものと考えられる。

教頭の大江春水は『中津バスタード辞書』を作った大江春塘の孫であり、病院長の藤野玄洋は洪庵やボードウィンに学び、明治九年県立大分医学学校の建言書を提出したことで知られる。

著者によれば、明治期になって中津の蘭学者たちにより運営された中津医学学校は、前野良沢に始まる中津蘭学の伝統の結果であるとしている。そこには藩主奥平昌鹿、昌高、九州初の解剖（二八一—九）を執刀した村上玄水、長崎で痘苗を入手して中津で接種に成功した平島正庵、種痘普及の医学館設立（一八六一）等が挙げられている。

本書には、手堅いミヒエル氏の「日本に関する観察」や、八木正自氏の「古書市場に漂流する洋学者の自筆史料」のようないずれにせよ、本書は二一世紀初頭における、日蘭交流史研究のレベルを示すものとして江湖の要望に応えるものである。

（石原 力）

〔思文閣出版、京都市左京区田中賣田町二一七、電話〇七五一七五二—一七八一、平成一四年二月二六日、A五判、五六六頁、本体一五〇〇円〕